

安全文化の推進 --- 医療安全のための組織風土の安全性

古代から、医療技術なくして医療は成立しない。現在の臨床現場は、高度かつ様々な専門技術の巨大な集合体である。医療機関は宇宙ステーションのような多種多様の機材と化学物質に囲まれている。医療者という人間がそれらを扱うには、それらに関する膨大な情報を安全に取り扱う必要がある。医療の現場はリスクだらけである。

電子カルテや調剤ロボットといった医療情報技術は利用者に多大な便利さを与えるが、医療現場の情報技術の開発はまだ一部の資材に過ぎず、現在の臨床現場では大部分の資材が情報ネットワークによって連結されていない。最近、そのような新たな病院全システムが国内外で開発され始めているが、これは安全工学でいう **Active Safety** の原理に従っている。近未来に、臨床現場にある膨大な資材は情報ネットワークによって、更に自動管理されるようになる。

しかし、開発された安全な医療技術を運用(マネジメント)するのは、究極的には人間である医療者の力である。例えば、自動運転が安全に作動しているかを、どこかで監視する人間の力が必要である。従って、極めて安全な技術でも、その利用者を取り巻く職場環境が安全を軽視する風潮では、高度かつ安全な世界には到達しえない。

医療技術の進歩は終わりが無い旅である。そのために医療での安全文化の推進も終わりは無い。終わりのなき旅を安全にやり過ごすには、安全な技術をナビゲートする組織風土の高い安全性が不可欠である。

技術の安全性と組織風土の安全性という2つの推進エンジンによって、安全文化が推進されるといえる。

2020年3月に東京大学で開催される第6回日本医療安全学会学術総会では、医療安全文化の次世代へのスマートな継承のあり方も討議されるとのことです。組織風土の安全性をどのように継承・発展するかは、医療安全文化が萌芽して20年目の日本における臨床現場の緊縛かつ重大な課題の1つです。